

牧師夫人の信仰と生活

『母の肖像』から

ノーベル文学賞作家パール・バックが自身の母について書いた伝記的小説『母の肖像』(1936年)には、父親(牧師)の額にある3つの赤い斑点について娘が母親ケアリーに恐る恐る尋ねる印象深いシーンがある。それは毎朝食前に1時間もかけてするお祈りによってできた指跡であった。「おかあさんはどうしていっしょにお祈りしないの?」と問う娘に対して、母親は答える。

「もしそんなに長いお祈りをしたら、だれがみんなの着替えをさせたり、朝の食事をつくったり、お掃除をしたり、あなたがたの勉強をみてあげたりすると思う? だれかがお祈りをしているあいだ、だれかが働かなければいけない、とわたしは思いますけどね。」(飛田茂雄訳)

牧師の夫は開拓伝道でしょっちゅう家を空け、家にも聖書の中国語訳に没頭し、家族を顧みることがない。子どもを亡くして茫然自失状態の妻ケアリーに対しても、ただ「神さまの御意志なのだよ」と応じるのみであった。ケアリー自身も神学校出身であるが、なかなか神の徴を見ることができないまま、夫とともに中国伝道に赴く。当地の過酷な環境の中で、ケアリーは持ち前の愛と知恵の限りを尽くして、家族を世話するのみならず、地元住民との悲喜こもごもの人間的な交流を通して、次第に人びとから慕われ、頼られるようになる。「神さま、神さま」と、いつも頭の中が「神さま」でいっぱいなの夫に比して、世俗世界での愛の実践に邁進するケアリーの方が皮肉にもよほど神に近い存在になっていく様子、そして牧師である夫との心の距離が描かれている。最も身近にいる妻の悲しみや悩みに気づかずして、どうして他の人びとを救うことができようか。このことは小説上の主人公ケアリーの個人的な問題に留まるものではなさそうである。

金魚鉢の中の金魚

やや古いデータであるが、日本基督教団全国教会婦人会連合の牧師夫人委員会が1978年に牧師夫人に対して行った実態アンケート調査の報告書にも、「牧師に最も近くて、実は最も遠いのが牧師夫人である」「牧師夫人に牧師はいない」との記述がみられる(全国教婦連1980)。そもそも牧師夫人に特別の資格はなく、(男性)牧師と結婚すれば自動的に牧師夫人になり、自動的にその役割を担わされることとなる。この点は(男性)住職とその配偶者(寺族)との関係と類似しており、いずれもそこには「牧師」や「住職」が男性であるという暗黙の前提がある。「牧師夫人」はあっても「牧師夫」という言葉を聞かないのは、この非対称性を端的に示している(同様に、「教会長夫」という言葉はない)。さらには「牧師の妻はクリスチャンである」という前提、つまり無宗教や他宗教だったとしても妻の方が当然キリスト教に改宗すべきだという先入観こそが、本質的には問われるべきであろう。

さて、牧師夫人は、一般の妻や母としてのアンペイドワークに加えて、教会運営の雑事や信徒からの相談相手などといった「見えない労働」をも担っている。また単なる一信徒で済まされず、模範的な信徒として振る舞うことを期待されるこ

とも多いという。常に周囲から見られ、役割期待される自らの状態を「金魚鉢の中の金魚」に譬える当事者もいる。それは直接的には住まい(牧師館)の問題とも関係してくる。「キリスト教の教会には応接間だけがあるが、天理教の教会には居間も台所もある」とは天理教内で肯定的に語られる話であるが、キリスト教の教会にもプライバシーの問題が存在することは、先述の1978年の日本基督教団の実態調査からも窺える。日本基督教団を含む3教派における「牧師夫人」問題を調査してきた川又俊則は、①プライバシー、②家計と〈牧師夫人〉の就職、③老後、④役割葛藤に分けて考察しているが、日本基督教団の1995年の調査では前回2回(1967年と1978年)と比べると、教会堂の建て替えなどを契機に、私生活の尊重はある程度守られるようになってきた、と指摘している(川又2002)。「来客を自分の家に招くかどうか自分の側で選択できるようなプライベートな住宅が必要」というのは牧師夫人の切実な願いであり、教会から独立した牧師館に住むことになったある夫人は「もう日曜日ごとに片づけ、明け渡さなくていいのです」と喜びを語っている。住まいの問題の改善は、川又の言う④の役割葛藤の改善・改革へつながっていく可能性も含んでいると思われる。牧師夫人問題は川又のような社会学の立場からだけでなく、女性史研究からのアプローチもなされている。

山室家の女性たち

年末になると街頭でみかける、赤いタスキの軍服姿とトランペットが目印の救世軍「社会鍋」。日本人初の救世軍士官(=牧師)、山室軍平(1872~1940)は、印刷工として働いていた時にキリスト教に入信し、苦学しながら同志社に学び、やがて救世軍に身を投じて公娼廃止・貧民救済等の社会事業に自らの生涯を捧げた、キリスト教社会福祉の先駆者としてつとに名高い。これまで軍平については多くの書物が著され、2016年には映画化もされた(東條政利監督『母の願い〜地の塩「山室軍平」』)。それに比して、軍平の生活と仕事を支えた女性たちは、自らも牧師(士官)でありながら「牧師夫人」を兼ね奉仕と犠牲の生涯を送った者が多いが、彼女たちのことはこれまで取り上げられることが少なかった。軍平の先妻で「救世軍の母」といわれた山室機恵子、軍平の後妻の山室悦子、機恵子との長女の山室民子、機恵子との長男の山室武甫の先妻、山室富士、後妻の小説家・阿部光子。主体的に牧師夫人となったものの、短命に終わった者もある。数少ない第一次資料に依拠した牧律氏の研究によって、軍平にかかわる女性たちの信仰と生活が近年明らかにされつつある(牧2011など)。

【参考文献】

- パール・バック『母の肖像』(飛田茂雄訳) 角川書店、1965年。
 日本基督教団全国教会婦人会連合編『ここにつかわされて』 燦葉出版社、1980年。
 川又俊則『ライフヒストリー研究の基礎』 創風社、2002年。
 牧律『山室機恵子の結婚—軍平の再婚論争に絡めて—』『キリスト教史学』65巻、2011年。
 三吉明『山室軍平』 吉川弘文館、1986年。